

## 津波、そして大学進学——故郷の復興の力になりたい 法学部 1年 山崎孝則さん

私は3月11日の東日本大震災による津波で被災しました。実家は岩手県の沿岸の山田町というところで、ベランダから海が見える場所に家がありました。とはいっても、故郷の三陸は歴史上何度も津波にあっていましたが、私の家の高さまで来たことはなかったそうです。そのため津波を甘くみていた私は3月11日、全く避難する気もないまま自宅ごと津波にのまれてしまいました。運よく助かりましたが家は流された後に地震による火災で全焼。家や車はもちろん、お気に入りのバッグや

思い出の品、ほとんどすべてがなくなりました。一段落して自宅を訪れると、近所の避難場所の高台にある小学校すらも津波にのまれていて、今回の津波の恐ろしさを思い知りました。

被災してからは、生きることに必死でした。当然、大学進学も諦めたというか、何も考えられませんでした。現在、私はこうして中央大学の学生になっていますが、それは中央大学が被災者支援を迅速に行ってくれたおかげでした。電話がつながるようになって、盛岡の親戚を通じて、情報の入手・手

続きを行ってもらいました。私は他の国公立大にも合格していたのですが、手厚い支援を素早く発表してくれた中央大学に進学することに決めました。上京後も住居の提供・家具の提供・精神面でのケアなど本当に手厚い支援をしていただいています。

将来は地元に戻りたいと考えています。そのため法学部での学習を通じて故郷の復興の力になれるような人になりたいです。サークルでも様々な人に出会うことができ、毎日かなりの刺激を受けています。まだ始まったばかりの中央大学での大学生活ですが、ここにいられることの素晴らしさを感じながら、さらに充実したものにしていきたいです。

## 東日本大震災を経て①——学生の声

### 行政の立場から、支援を社会に還元できるように 法学部 4年 武藤 有沙さん

3月11日、大学にいた私は、周囲が「震源地は東北」と言っているのを聞き、血の気が引く思いがした。かけてもかけても、福島の実家に電話はつながらない。地震発生から約3時間後、ようやく母と連絡がついた。「みんな無事だが、足の踏み場もない」と、少し動揺していたが、無事を確認でき安心した。

我が家には介護を要する祖父がいる。逃げるにも足腰が利かないため、最初の地震の際は外れたふすまの下敷きになっていたようだ。

築30年ほどの実家は、体験したことのない地震に大きな悲鳴を上げた。

柱は割れ、床板も浮き上がって湾曲し、1階のほとんどすべての部屋で壁に大きな亀裂が走る。家を囲うブロック塀はほぼ崩壊し、通行人がけがをしないよう内向きに倒した。市役所から

受けた罹災証明では、半壊の認定が下りた。地震の後、家の修繕をしても、余震によって直したところからまた壊れてゆく。被災した家の中で過ごす不安もあるが、修繕費も多額に上るため、なかなか手をつけられないのが現状である。

また、福島第一原発の放射能問題は特に深刻である。

私の地元は、原発から約60キロ離れた内陸地にある。最近では公園に「1時間以上遊ばないでください」といった立て看板があったり、カップやマスクを着けて登校する小学生も見かける。家族の健康を考えると先は明るくないが、かといって福島を離れることもできない。

もともと農業・漁業が盛んであった東北が、原発問題で大打撃を受けた。震災の前でさえ、景気が落ち込み、雇

用や経済の悪化が顕著な地域が、これからどうなってしまうのだろうとますます不安である。

そんななか、東北各県の知事などが「復興には、若い力がぜひとも必要だ」と言うのを聞いていると、私もこれから社会に出る一人として何か力になりたいと思う。いろいろな方法はあるだろうが、私は行政の立場から関わっていきたいと思い、行政官を目指している。

昨今、公務員に対する風当たりは強いが、今回の地震で役場の機能が失われてしまった地域もあり、住民にとっての行政の重要さを再確認した。また、自らも被災者でありながら「全体の奉仕者」として、昼夜を問わず働く職員の姿には心を打たれた。

自分にできることは少ないかもしれないが、この大学で学び、身につけた知識を知恵に変えて、人の役に立ちたいと思う。今回ご支援いただいた奨学金以上のものを、社会に還元できるように努力したい。

東日本大震災からちょうど100日目となる6月18日(土)の午後、まだ梅雨も明けない湿度の高い多摩キャンパス桜広場の片隅にひっそり苔むし佇む茶室「虚白庵」にて、今回の震災で被災した日本人学生と、震災後も中央大学で

学び続ける近隣アジアの留学生が集まり、学長を囲んで「大震災後の復興とアジアの協力関係を考える」というテーマで座談会を行いました。

## 東日本大震災を経て②——永井学長と学生による座談会 「大震災後の復興とアジアの協力関係を考える」

「距離だけではなく、心も近くなってきた——」

学長：今回は震災に遭った地域出身の日本人学生と、今回のことで支援いただいている東アジア地域出身の留学生が、お互いにこの震災を機にどんなことを感じ、今後どうしていきたいのかについて語ってもらいたい。とりわけ今回の震災で韓国、台湾、中国の、本当に多くの人々から義援金が寄せられ、韓国からは救援隊が真っ先に派遣されました。こういったことは——君らは若いからあまり感じていないかもしれないが、戦後65年の歴史の中で初めてのこと。日本人全員が感謝しているに違いない。そういうことを私たちが共通認識した上で、君らにはこの震災を機に、今後のアジアについて考え、話し合ってもらいたい。留学生については、自分たちの母国の人たちがどういう気持ちで義援金を日本に拠出したのか、その気持ちをご紹介いただきたい。

ユ：中国は、2年前に四川省で大きな地震を体験しました。その時も日本からの救援隊や現金の援助がたくさんありました。今回日本でも大きな地震が発生したということで、中国の人々も震災に対して非常に悔しい、残念という気持ちを強く持っていると思います。皆積極的に日本の支援をしたい。しかもいろいろな形で支援したいと話していました。



桜広場の奥にある茶室「虚白庵」で行われた

コウ：台湾も去年災害があつて、真っ先に日本が救援隊を出してくれました。日本と台湾は正式な国交はないけれど、台湾人は日本に親近感を持っています。友達が大変な時期だからこそ応援したいという気持ち、社会に広がっていると思います。



コウ・テニイさん(経済学部経済学科3年、台湾・高雄市出身)

ファン：最近になって日韓で文化交流があり、距離だけでなく心も近くなったと感じています。韓国の若者は日本を好きだと思っている人が多いのですが、お年寄りには戦争や領土問題があり、嫌っている人もいます。でも国全体で考えるとそういう人たちも、今回の大震災に対して、とりあえずその問題は置いておき人間を助けるべきだと——国をあげて日本を助けようとしています。

学長：そんな話を聞いて、安原君はどう思う？

安原：日本人の良さは団結力だとか他人を思いやる心と聞いていましたが、自分では生活の中で実感できていませんでした。私は日本の良さは何か、日本って、何だろう、と懐疑的に思っていました。まず海外に目を向け、そこから日本を見つめ直してみようと思い、この大学に来ました。このタイミングで大震災が起こり、避難所のラジオで東アジアをはじめ全世界から日本が支援されていることを知りました。日本は世界から愛されているんだ、こんなにも世界の注目をひきつける日本の魅力って何だろうと、もう

一度考えてみたくなりました。

阿部： 私は震災が起きた時に語学研修でカナダにいました。その時は震災がここまで大きいと思っていませんでしたが、帰国後、自分が18年間暮らしていた場所を見て、とても信じられませんでした。正直あまりの変貌に、涙も出ませんでした。でもその中で、感謝の気持ちだけは忘れてはならないと思いました。支援物資にしても、食料にしても——本当にそれがなかったら、私の家族や周りの人たちは、駄目だったに違いない。そう思うと、今は大変な時期で自分のことで精一杯ですが、落ち着いた時に何かが起こったら、今度は私たちがその人たちに恩返しをしたいと思いました。

### 「人と人との交流 ——これが一つの転機になると思います」

学長： 私が中国に最初に行ったのは文化大革命が終わってすぐの頃。韓国に行ったのも随分昔になる。戦後の日本との関係をいろいろ見てきたからこそ、今回の支援に対してさっきファン君も言っていたように、こういう国民感情の中で、これだけの義援金をいただけるとは思っていなかった。歴史から見ると、日本に対してそれぞれの国から義援金が集められ、これだけ巨額になり、多くの人が協力しているということは信じられない感がある。国民感情がここに来てかなり変わったのか、またそうでなくても、こういう被災した隣人に対する思いやりとして表れたのか。今後の東アジアの協力関係を考える上で大きなポイントだと思う。そういうところで、君らが今後、この東アジア——隣人関係の一員として、今後どういう風にしていきたいと思っているか、世界の中の一員として、どういう風に将来を考えているか、そのところを聞かせて欲しい。



司会・進行役を務めた、永井和之総長・学長

ファン： 確かにこれからは東アジアの国々のつながりはもっと強くなると思います。いずれはEUのように、東アジア地域にも連合ができて、もっと文化的・経済

的な交流が活発になると思います。私はその中で、日本と韓国の間で活躍できる人になりたいと思っています。日本に来て、いろいろな外国人の友達もできました。その中で考えの合う人と東アジアでできることを模索していきたいと思っています。



ファン・サンウオンさん（商学部商業貿易学科2年、韓国・釜山出身）

阿部： 年配の人だと歴史のことで受け入れられない部分があると思いますが、私たちはそういう体験をしていないので、正直わかりません。その分、そういうのをとっぴらって仲良くできる関係もあると思います。もっと東アジアで、歴史的背景を抜きにして仲良くしてお互い発展できたらと思います。

ユ： 歴史的な問題で日本と中国の間の仲が悪いというイメージはありましたが、今回の地震で——中国のテレビでは全然情報が流されていませんが、ネットでは日本を支援するコメントが多くあります。そこから見ると、日本と中国の関係は——特に若者の間では「仲良くしたい」という傾向があります。それから、中国と日本は最も大きな貿易相手国です。最近、温家宝首相も日本に来て、韓国も含めアジアの中で貿易をもっと促進しよう、という提案をしていました。

安原： 私は、今まで日本が他の国々に対してひどいことをやってしまったという、そこを抜きにして付き合い方もいいものなのかと考えます。確かに抜きにした方が付き合いやすいのかも知れませんが、忘れてもいけないのかな、と思っています。でも今回の震災では本当に自分でも予想しなかった大きな支援をいただきました。韓国や中国や台湾の方から一歩、日本に歩みよって来てくれたと思っています。それに日本も応えていければいいと思っています。

コウ： さっきファンさんが言っていたように、2000年以降、アジアもEUのように一つになるという動きがありました。これまではアジアの国は経済中心であり、歴史は置いておいて——という感じでした。この震災を機に、人と人との交流——これが一つの転機になると思います。

「一緒に、住みやすい東アジアを作りたい」

学長： 歴史は事実としても、これからの将来を考える時にこの震災の不幸の中で示された隣国の善意というのは、新しい未来を暗示しているのかなと思う。またそれに期待したいと思います。自分はどう生きていきたいと思っているか、自分はこういう風に将来やりたい、学生生活の経験をふまえ、自分の将来、またアジアがどういう位置づけになっていくのか、その点で考えるとところがあれば、教えて欲しい。学年が一番上のユ君から。

ユ： 私は、自分のできることをしたいと思っています。可能な範囲で日本と中国の交流——文化でも経済でもいいから貢献したいと思います。今、中国留学生会の会長をやっていますが、社会に出ても中大のOB会のようなグループに参加し続けたいと思います。それによって両国の交流を活発にしたいです。私は今年で、日本で就職活動をしています。将来は日本と中国の架け橋になればと思っています。できれば、医療に関わる分野の企業に就職したいと思っています。日本でも世界でも、今回の地震でたくさんの方が亡くなり、命の大切さを感じています。もっと人を救えるように貢献したいと思っています。



ユイチイさん(商学部経営学科4年、中国・上海出身)

学長： 就職活動がうまくいくといいね。キャリアセンターからアドバイスを受けるといい。今回の就職活動は、震災の影響でメガバンクや消費者金融の採用が遅れています。今までにない形で、例年は一気にやって来た求人が、分かれて来ている。うまくキャリアセンターを使うことをお勧めする。

コウ： 私は今年3年生です。今後のことを考えると就職先は商社——国と国の架け橋になるような会社に就職したいと思いました。

学長： 秋から就職活動、頑張ってください。

阿部： 将来は決まっていますが、今回の震災で実家が心配なので、地元に戻りたいという気持ちもあります。

す。でも状況が状況なので、まずは東京での就職を考えています。私は今、中国に興味を持っていて中国語も勉強しています。そのうち中国に留学したいと思っていますが、お金のこととか家族のことがあるのでなかなか叶いません。機会があれば、お金をためて行きたいと思っています。



阿部志穂美さん(経済学部経済情報システム学科2年、宮城県・石巻市出身)

学長： 経済学部には、阿部さんのような方に適用される鈴木敏文元理事長の奨学金制度があります。ぜひ、チャレンジしてほしい。中国には今、世界中から学生が来ている。しかも多国語で授業が行われており、いろいろなコースが用意されています。頑張ってください。

ファン： 私は中央大学を卒業後、日本の企業に就職して、ゆくゆくは自分で会社経営をしたいと考えています。まずは自分がその国の、地域の人たちの生活を良くして、経済力を上げたいと思います。どこの地域でも産業があつてこそ国が発展するので、その国の特徴——発展できるところを発見して、伸ばせるところを伸ばしたい。それが、自分ができることだと思っています。将来自分の思い通りになっていけば、私も結構儲かっているはずですので(笑)。そのお金で自分だけが楽しまないで、周りの人にも目を向けて一緒に住みやすい東アジアを作りたいと思います。最初は、どうすれば儲かるかと、そういうことばかり考えていましたが、今回震災のボランティアに行って、いろいろな人に出会い、助け合う人を見て、人間の生き方は商売ばかりではないと、考え方が変わりました。もしも会社を持つことになったら、自分の利益ばかりでなく、社会のことを考えようと思うようになったんです。今は、いろいろな人と出会って助け合う——そんな生き方をしたいと思っています。

安原： まずはこの夏休みにバンコクとチェンマイに行こうと思っています。子供の施設に行ったり、山岳民族の方たちと生活したりする予定です。私は小学生や中学生の頃から何気なくボランティア活動に参加していたのですが、自分が誰かに必要とされている時

に自分は生きがいを感じると思いました。世界には貧困や紛争や自然災害で苦しんでいる人がいます。アジアも含めて世界のどこかで——国でなくても、誰か一人でもいいので、必要とされる人間になりたいと思っています。



安原元樹さん(総合政策学部政策科学科1年、宮城県・仙台市宮城野区出身)

「20年後、中央大学の卒業生としての誇りを持って夢を実現してほしい——」

学長： 皆の夢を実現するためにはかなり力をつけなくてはならないと思う。君らが20年後、まさに社会の担い手になっている40代。それぞれがこの記事を見て、当たっている、当たっていないと思い出しながら振り返る。それが今日の座談会に参加した一番の

記念になると思う。事務局長から一言、ありますか？

浜野： 20年後に私は生きていないかも知れませんが(笑)。本学は昨年創立125周年を迎えたので、20年後だと、創立150周年を迎える準備の時期になっているかと思います。是非、皆さんのこれからの活躍の中で、中央大学がどういう風に発展するのか、期待を持ってほしい。世界で存在感のある中央大学——その大学の卒業生として、誇りを持って各々の夢を実現してもらえればいいと思います。

学長： 創立150周年記念でまたこのような企画を行い、同じメンバーが集まって20年前を振り返って楽しい話しを交わせるようになっていけばいいですね。今日はありがとう。



## 国際交流センター

### 留学生および父母向け説明会 韓国・ソウル、中国・上海で実施

東日本大震災直後の各国政府や協定大学等による帰国勧告や渡航自粛勧告、さらには母国の報道等の影響を受け、中央大学でも多くの外国人留学生が一時帰国し、その後の来日延期や留学中止を望む声が高まりました。このような状況の中で、本学は外国人留学生に対して迅速に特別措置を講じたため、留学生ならびにその両親に安心感を与えることができ、5月の連休明けにはほとんどの外国人留学生が授業に戻り、日本人学生と共に頑張っています。

本学では、大震災直後から協定大学や海外諸機関から50通を超えるお見舞い・激励のメッセージが寄せられる一方、留学中止や延期の要請が相次ぎ

ました。このような中で5月9日までに来日すれば授業の欠席や履修登録等の各種手続について不利益を被らないよう配慮する「来日猶予期間」を設定し、外国人留学生に対する特別措置を講じました。その結果、協定大学からの交換留学生は「来日猶予期間」終了後までに当初の予定数の約半分の33名が本学での留学生生活をスタートしました。一方で、本学に在籍する私費の外国人留学生は4月12日の授業開始日までに約7割が戻っており、来日猶予期間終了後にはほぼ全員が元気に授業に出席するようになりました。

一方で、ご両親の反対を押し切り来日した外国人留学生も多く、ご子女の日本留学に不安を抱えているご両親等がたいへん多かったため、本学では4月23日に韓国ソウル、5月15日に中国上海で父母説明会を実施しました。ソウル会場では「来日猶予期間中」と

いうこともあり、本学への留学継続を躊躇していた留学生も含めて35名が出席、上海では40名のご父母が出席されました。両会場では本学の現状と取り組みを説明し、元気に留学生生活を送っている様子をビデオレターにてお伝えしたほか、母国で活躍している本学卒業生に多数お手伝いをいただき、参加ご父母の日本留学への不安を和らげることができたばかりでなく、学業や将来の進路を含めて広範囲な個別相談にも対応することができ、本学の対応を高く評価いただくとともに、多くの感謝の言葉をいただきました。

